

【原著】

保育者効力感と対児感情との関連

早坂正年*¹・有馬比呂志*²

Relationship between pre-school teacher efficacy and feelings toward babies

Masatoshi Hayasaka & Hiroshi Arima

I. はじめに

2009年4月に施行された改訂保育所保育指針は、厚生労働大臣による告示として位置づけられ、保育士にはさらなる専門性の深化と責務が求められるようになった。その流れに伴い、保育者養成校にも、保育現場の様々なニーズに対応できる保育者の育成が求められるようになった。しかし、保育現場が求めるような実践力を兼ね備えた保育者養成を望む声は、近年に始まったことではない。かねてより、保育現場からは保育者養成に関わる数多くの提案が寄せられ、その声に応じるように研究者からは様々な研究成果が報告された。なかでも、保育者養成における保育・教育実習（以下、実習）は、実践力を養うことができる貴重な機会として位置づけられ、実習を対象とした研究は数多く行われている（例えば、三木・桜井, 1998; 板垣, 1999; 梅田, 2002; 三木・廣瀬, 2004; 中津・神林・松田, 2007など）。特に、三木・桜井（1998）が行った保育者効力感の研究は、保育者養成における新たな指導法を創出するための先駆的な研究となり、効果的な教育・指導を実現するために心理学的な観点をを用いることの有効性を裏付け、様々な研究報告を生み出すきっかけにもなった（例えば、西坂, 2002; 石川, 2003, 2005; 三宅, 2005; 野崎, 2007; 大城ら, 2007など）。このような背景もあり、今日においても心理学的な観点を導入した保育者養成の期待は高まっている。

ところで、保育者効力感とは保育者を目指す学生にとっても、保育現場の最前線で活躍する保育者にとっても、重要な心理的ファクターとして扱われ、積極的に研究がなされているが、どのような概念を有しているのだろうか。三木・桜井（1998）によれば、保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義されている。そもそも、保育者効力感とはGibson & Dembo (1984) やAshton (1985) などの教師効力感に関わる一連の研究や、韓国において先駆的に保育者の効力感に焦点を当てたGorrell & Hwang (1995) の研究が発端となり考案されている。加えて、保育者効力感の理論的枠組みは、Bandura (1977) によって提唱された自己効力感の考えに従うものであり、同時に開発された保育者効力感尺度も構成概念の妥当性が綿密に検討されている。保育者効力感に関する研究が、保育者（保育場面）に限定されて用いられるにも関わらず、多くの研究者に支持されるのは、一連の先行研究を熟考し整理した三木・桜井（1998）らの取り組みがもたらした結果といえよう。また、三木・桜井（1998）が、Gibson & Dembo (1984) によって開発された教師効力感尺度（30項目）と、保育者効力感尺度（10項目）には明確な違

* 1 仙台医療福祉専門学校 (Sendai Vocational College of Health and Welfare)

* 2 広島文教女子大学 (Hiroshima Bunkyo Women's University)

いがあることを強調し、保育現場に即した項目に精選したことが、多くの研究者や実践家の注目を集めることになったのかもしれない。これらの先行研究の変遷に関しては、三宅（2005）が整理しているため詳細は譲るが、保育者効力感是我が国で独自に洗練されてきた研究であることは理解できよう。

さて、前述したように、近年においては学生の心理的变化を客観的に捉え、それを教育や実習指導へ反映する試みが数多く見られるようになった。特に、心理的な変化を捉えるツールとして保育者効力感尺度が頻繁に用いられるが、それに伴って様々な知見も見出されている。例えば、三木・桜井（1998）は、実習を経験することによって保育者効力感が上昇することを報告しているが、石川（2003）では、実習経験が必ずしも上昇をもたらさないことを報告している。この相違について石川（2003）は、学習の深まりや実習を通して抱かれる子どもへの疑問や不安が保育者効力感を低下させている可能性がある」と説明している。一方、三宅（2005）は、現場の経験が乏しい学生にとって、実践的な場面を強く反映した尺度の項目が現実には即さない可能性があることを指摘し、一貫した結果が得られない現状を理解する手掛かりを与えている。つまり、保育者効力感尺度を使用するにあたっては、その特性を十分に理解し、調査結果の解釈には調査対象者の職業的発達を踏まえたうえで考察を行うことが望ましいと提案している。しかしながら、これらの指摘がありながらも、この相違に関わる十分な説明や、三宅（2005）の見解を反映させた研究は現時点においてほとんど見当たらない。したがって、この現状が整理されないままで保育者効力感尺度が使用されることは、この領域の研究の進展に関わる重大な課題であり、更なる議論が切望される。

早坂ら（2008）は保育者効力感とは別に、子どもへの感情、すなわち対児感情という観点から、学生の心理的变化を理解することを提案している。花沢（1992）によれば、対児感情とは「児を肯定的に捉え受容する方向の接近感情と、否定的に捉え拒否する方向の回避感情」と定義されているが、現在のところ保育者を対象とした対児感情の研究はほとんどない。おそらく、対児感情を測定する対児感情評定尺度そのものに対して、保育者として必要な力量を測定する妥当性が検証できていないことに理由の一つが上げられる。しかし、保育者を対象とする学生にとって、子どもに対しどのような感情を抱くかは、保育者としての学習の動機づけを左右するものと考えられよう。また、養成校の教員が学生に対し、子どもへの関わりを促す指導を行う上でも、対児感情という観点を活かすことは有効ではなからうか。さらに、保育を専攻する学生の多くが、保育者としての信念を抱えて入学するよりも、子どもが好きであるという感情レベルの理由を持って入学する場合の方が多きを想定すると、教育や指導において対児感情を扱うことは、特に入学して間もない学生を導く上で有効であると考えられる。したがって、子どもへの感情がどのように変化するのか、保育者としての成長を辿る際に保育者効力感と対児感情がどのような関連を持つかを検討することは重要であるといえよう。加えて、保育者効力感と対児感情の関連を検討することは、保育者養成における新たな指導方法を創出する糸口になるだけでなく、三宅（2005）が危惧する保育者効力尺度の課題を整理するための基礎的資料としても寄与できると考えられる。

そこで本研究では、保育士養成課程に在籍する学生を対象に保育者効力感と対児感情の調査を行い、その関連について検討することを目的とする。

II. 方 法

調査対象 保育を専攻する学生1年生から3年生までの164名が対象であった（平均年齢： $M=19.95$, $SD=2.16$ ）。

調査時期 平成20年9月下旬～11月下旬（1年生：10月上旬，2年生：11月下旬，3年生：9月中旬）。

調査内容 三木・桜井（1998）の保育者効力感尺度（10項目：TABLE 1）に対しては原版に従い、「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそうは思わない」「ほとんどそう思わない」の5件法で回答を求めた。対児感情の調査に関しては、花沢（1992）の対児感情評定尺度（28項目）を基にして新たに精選された、早坂ら（2008）の修正対児感情評定尺度（21項目：TABLE 2）を用いた。なお、回答については花沢（1992）の原版を尊重し、「非常にその通り」「そのとおりの」「少しそのとおりの」「そんなことはない」の4件法で実施した。

TABLE 1 保育者効力感尺度（三木・桜井，1998）

1) 私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う
2) 私は、子どもの能力に応じて課題を出すことができると思う
3) 保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う
4) 私は、どの年齢担任になっても、うまくやっ ていけると思う
5) 私のクラスにいじめがあったとしても、うま く対処できると思う
6) 私は、保護者に信頼を得ることができると思 う
7) 私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切 な対応ができると思う
8) 私は、クラス全体に目をむけ、集団への配慮 も十分できると思う
9) 私は、一人一人の子どもに適切な遊びの指導 や援助を行えると思う
10) 私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環 境（人的、物的）に整えることに十分努力が できると思う

TABLE 2 修正対児感情評定尺度（早坂ら，2008）

項 目	第 I 因子 「接近」	第 II 因子 「回避」
うつくしい	.673	-.064
うれしい	.672	-.147
たのしい	.669	-.010
やさしい	.639	-.098
ういういしい	.624	.116
あかるい	.620	-.016
すばらしい	.611	-.061
すがすがしい	.601	-.049
あたたかい	.547	-.114
ほほえましい	.528	-.211
みずみずしい	.501	.148
てれくさい※	.420	.275
あまい※	.337	.101
はずかしい※	.296	.139
いじらしい※	.223	.158
うっとおしい	.154	.774
めんどくさい	-.176	.734
わずらわしい	-.054	.718
あつかましい	-.207	.706
やかましい	-.190	.684
じれったい	.163	.592
なれなれしい	-.042	.550
くるしい	-.040	.476
むずかしい	.181	.471
こわい	.099	.456
うらやましい※	.180	.329
よわよわしい※	.145	.224

注 ※は残余項目を示す。主因子法バリマックス回
転（累積寄与率33.8%）

Ⅲ. 結 果

各尺度の学年ごとの数値 保育者効力感尺度，修正対児感情評定尺度のそれぞれの数値はTABLE 3に示す通りである。はじめに保育者効力感尺度の学年による差を検討するために1要因の分散分析を行ったところ，有意な差が認められた ($F(2, 161)=5.84, p<.01$)。さらに，多重比較を行ったところ，1年生と2年生，1年生と3年生との間に有意な差があることが確認された。次に，修正対児感情評定尺度に関しては，等分散が仮定されなかったためKruskal-Wallis検定を実施して学年差を検討した。その結果，「回避」においては有意な差が認められ ($\chi^2(2)=5.93, p<.05$)，その後の多重比較において1年生と3年生で有意な差が確認された。一方，「接近」においては，有意な差が認められなかった ($\chi^2(2)=1.99, n.s.$)。

TABLE 3 保育者効力感尺度，修正対児感情評定尺度（下位尺度）の各数値

	保育者効力感尺度	修正対児感情評定尺度	
		回 避	接 近
1年生 (N=46)	30.96 (5.84)	13.48 (3.15)	34.61 (5.04)
2年生 (N=59)	26.36 (7.81)	14.92 (5.10)	32.51 (7.22)
3年生 (N=59)	27.22 (7.38)	15.66 (4.60)	33.49 (5.98)
計	27.95 (7.36)	14.78 (4.50)	33.45 (6.25)

() は標準偏差を示す。

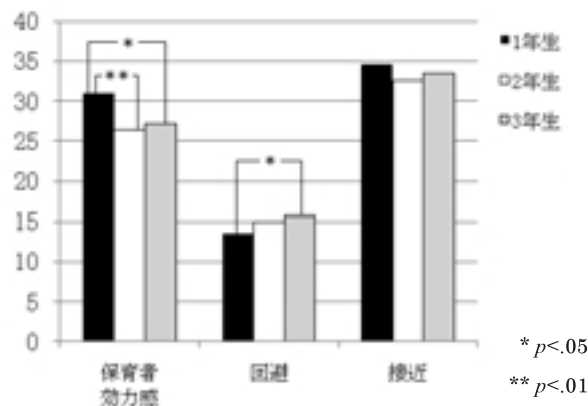


Fig. 1 学年ごとの各数値と多重比較結果

保育者効力感と対児感情の相関関係 保育者効力感尺度と修正対児感情評定尺度の相関係数を算出したところ，保育者効力感と「回避」では負の相関がみられ ($r=-.258, p<.01$)，保育者効力感と「接近」では正の相関がみられた ($r=.328, p<.01$)。次に，先の分析で各尺度において学年差が認められたことを考慮し，学年ごとに尺度間の相関係数を算出した。結果はTABLE 4に示す通りであり，保育者効力感と「回避」では2年生で負の相関が認められ，保育者効力感と「接近」では1年生と2年生に正の相関が認められた。

保育者効力感と対児感情との関連

TABLE 4 学年ごとの保育者効力感尺度と修正対児感情評定尺度（下位尺度）の相関係数

保育者効力感	修正対児感情評定尺度	
	回避	接近
1年生	-.226	.418**
2年生	-.306*	.384**
3年生	-.121	.157

* $p < .05$, ** $p < .01$

IV. 考 察

保育者効力感の学年差を検討した結果、1年生に比べ、2・3年生の方が低い数値を示すことが明らかになった。この学年が上がるにつれて保育者効力感が低下する傾向は、保育専攻学生を対象に縦断的な調査を行った石川（2003, 2005）の報告を一部支持している。彼の観点に従えば、本研究の現象も、学習の深まりや実習を通して抱かれる子どもへの疑問や不安が保育者効力感を低下させていると読み取ることができるとも考えられる。しかし、有意差は認められなかったが、2年生よりも3年生の数値が僅かに上昇していることを踏まえると、学習の進展や様々な経験の積み重ねが保育者効力感の高まりを支えている様子も否定できないといえよう。したがって、三宅（2005）が指摘するように、現場経験が乏しい学生への保育効力感尺度の利用はより慎重に行う必要があるだろう。

他方、対児感情に関しては学年による差が一部で確認された。本研究では、学年が上がるにつれて対児感情の「回避」が上昇しており、子どもを否定的に捉えようとする感情が高まっていることが示された。また、有意な差は確認できなかったものの「接近」では、1年生よりも2・3年生の方が平均値が低く、子どもを肯定的に捉えようとする感情は学年が増すごとに低下する様相が窺われた。これらのことから、学年が増すごとに抱かれる子どもへの疑問や不安は、対児感情の変化にも影響を与えている可能性が推察された。

次に、保育者効力感と対児感情の相関関係を検討したところ、両者には有意な相関係数が認められ、対児感情は保育者効力感の増減に関連している可能性が明らかになった。さらに、学年ごとに各尺度間の相関係数を検討したところ、学年ごとに相関関係が異なることが見出された。1年生においては保育者としての力量は、子どもに対する肯定的な感情によって支えられている可能性が推察された。2年生においては、子どもへの否定的な感情と肯定的な感情が保育者効力感の形成に影響を持つ可能性が窺われた。一方、3年生においては保育者効力感と対児感情の関連性が低いことが見出された。この現象は、学習の進展と関連しているかもしれない。例えば、調査の対象となった養成校では、1年次には講義を中心に保育に関わる原理系の科目が開講されているため、実践場面での保育者としての自己像が描きにくく、保育者としての力量を問われるときには子どもへの肯定的な感情といった限られた情報を手掛かりに評価が行われた可能性が考えられる。また、2年次には、保育内容に関わる演習科目の増加や施設実習（居住型児童福祉施設実習）が行われることもあり、徐々に保育現場の保育者像や子どもの姿がどのようなものかが理解できるようになっていくと思われる。その際には、子どもへの肯定的な感情のみならず、否定的な感情も参考にしながら保育者としての評価が行われているのかも知れない。そして、保育所実習が行われる3年次には、様々な学習や経験を通してより実践力を伴った知識が蓄えられる。このように保育者としての学習における専門性が高まるこ

とで、子どもへの感情が必ずしも保育者としての力量を左右するものではないという気付きを与えているのではなからうか。特に、保育実習に伴って行われる指導は、専門家としての保育者の姿を具体的に描く機会となり、この現象を促すことに寄与したのかもしれない。

本研究は、保育者効力感と対児感情の関連を検討する基礎的研究であり、いくつかの改善の余地が窺われる。1つに、対児感情が保育者効力感の形成に影響を与えるのか、あるいは保育者効力感の影響力が対児感情の形成を左右するのかを十分に検討を行っていないという課題がある。2つに、本研究は横断的研究であり、より厳密な検討を行うためには縦断的研究で再調査を行うことが望ましいであろう。また、本研究では保育所実習前のデータを分析したが、実習後にも焦点をあて、一連の変化を捉えることでより詳細な検討を行うことが可能になる。さらに、今後は保護者の性差を考慮に入れた検討も課題となるであろう。

<引用文献>

- Ashton, P.T. 1985 Motivation and the teacher's sense of efficacy. In Ames, C. and Ames, R. (Eds.) *Research on Motivation in Education. Academic Press.*
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Gibson, S., & Dembo, M.H. 1984 Teacher efficacy: A construct validation. *Journal of Educational Psychology*, **76**, 569-582.
- Gorrell, J., & Hwang, Y.S. 1995 A study of efficacy beliefs among preservice teachers in Korea. *Journal of Research and Development in Education*, **28**, 101-105.
- 花沢成一 1992『母性心理学』医学書院。
- 早坂正年・富樫裕一・鈴木純子・服部典子 2008 保育介護福祉学科学学生の対児感情について—対児感情評定尺度に関する提案—, 実学教育研究, **2**, 17-32.
- 石川隆行 2003 保育者を目指す短大生の保育者効力感について 一宮女子短期大学研究報告, **42**, 315-322.
- 石川隆行 2005 保育者を目指す短大生の保育者効力感について—2月の追跡調査より 聖母女学院短期大学研究紀要, **34**, 96-99.
- 板垣健太郎 1999 保育実習の事後指導に求められる知識と技能について—個別指導事例に基づく検討— 保育士養成研究, **17**, 1-14.
- 三木知子・廣瀬則子 2004 保育専攻短大生の園・自己評価についての実習間比較と一般性自己効力感 保育士養成研究, **22**, 57-65.
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, **46**, 203-211.
- 三宅幹子 2005 保育者効力感研究の概観 福山大学人間文化学部紀要, **5**, 31-38.
- 中津愛子・神林ノブ子・松田幸恵 2007 保育実習の事前指導における保育所見学観察実習 保育士養成研究, **25**, 19-25.
- 西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響 教育心理学研究, **50**, 283-290.
- 野崎秀正 2007 保育専攻学生における保育者効力感・実習ストレスと援助要請過程との関連 宮崎女子短期大学紀要, **34**, 87-96.
- 大城りえ・上地亜矢子・津多久美子 2007 保育科学生の保育者効力感に関する研究 沖縄キリスト教短期大学紀要, **35**, 59-67.
- 梅田優子 2002 教育・保育実習に関する研究の動向 県立新潟女子短期大学研究紀要, **39**, 59-68.

<付 記>

本研究の一部は、全国保育士養成協議会第48回研究大会において発表したものです。本論文の作成にあたり、ご協力いただきました仙台医療福祉専門学校富樫裕一先生、鈴木純子先生、服部典子先生に心よりお礼申し上げます。また、本調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

—平成21年10月29日 受理—